

# 大学における安全に関する社会心理学的研究

## —大学の安全のための協働の意図を向上させる要因の検証—

関西大学大学院部 社会学研究科  
塩谷尚正

### 問題

#### 背景

近年、大学生による犯罪が数多く発覚している。窃盗、暴行、詐欺、薬物関連などその罪種は多岐にわたり、それらが大学構内において発生している場合も少なくない。大学生と犯罪との関連がどのように推移しているか、ここで社会統計の側面を確認する。警察庁による統計では大学生による犯罪の実数がどのように表されているだろうか。2000年から2009年までの10年間の刑法犯で検挙された人員数における大学生の比率と検挙人員数を図示したものが Figure 1 である。その結果、総検挙数における大学生の比率はもとより3-4%程度と小さいこともあり、顕著な変化は読み取れない。大学生の検挙数については2007年頃からここ数年、わずかながら減少傾向にあることが見て取れる。その一方で大学生による犯罪の報道件数はどのように推移しているか、朝日新聞データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」によって記事検索をおこなった。2000年から2010年までを範囲とし、「『大学』と『学生を逮捕』、ただし『中学』を除く」と、「大生を逮捕」をキーワードとした検索結果が Figure 2 である。ヒットした記事の数は一貫して増加傾向というわけではないが、2010年(44件)は2000年(22件)の2倍に達しており、特に2008年以降の増加傾向が顕著である。犯罪に関

するリスク認知や不安感においてメディア報道は一定の社会的影響を有すると考えられることから、大学という場の安全や秩序はどのように維持されるのかという問題は、重要性を増しつつあるといえよう。そこで本研究では、大学の安全を維持・改善するうえで有効となる要因について社会心理学による1つのアプローチを試みる。

大学という場の特徴を考えると、第一に学問や研究を目的とする自治組織であり、教育的観点からも学生の自主性が重んじられていることが挙げられる。また大学によっては、近隣住民が自由に出入りできるようにキャンパスを開放している場合も少なくない。しかしながらこうした特徴が犯罪に対する無防備さにつながっているという指摘がなされることがある。例えば大学キャンパスでの大麻売買が発覚し学生の逮捕者を出した近畿地方のK大学の事件では、逮捕学生が上述のような大学の特徴をふまえて犯行に及んだことを供述している(関西大学, 2008)。大学の安全を維持・改善するためには、学生一人ひとりが防犯意識やモラルをもつというのはもちろんのこと、さらに友人や周囲の人に安全を脅かす問題が及んでいかという配慮や注意をしようという意識をもち、またそのために行動することが重要となる。つまり大学の安全を集団の問題としてとらえ、学生たち自身の手で、共に大学を安全な場にするという行動を起こすことが求められ、大学の安全は学生

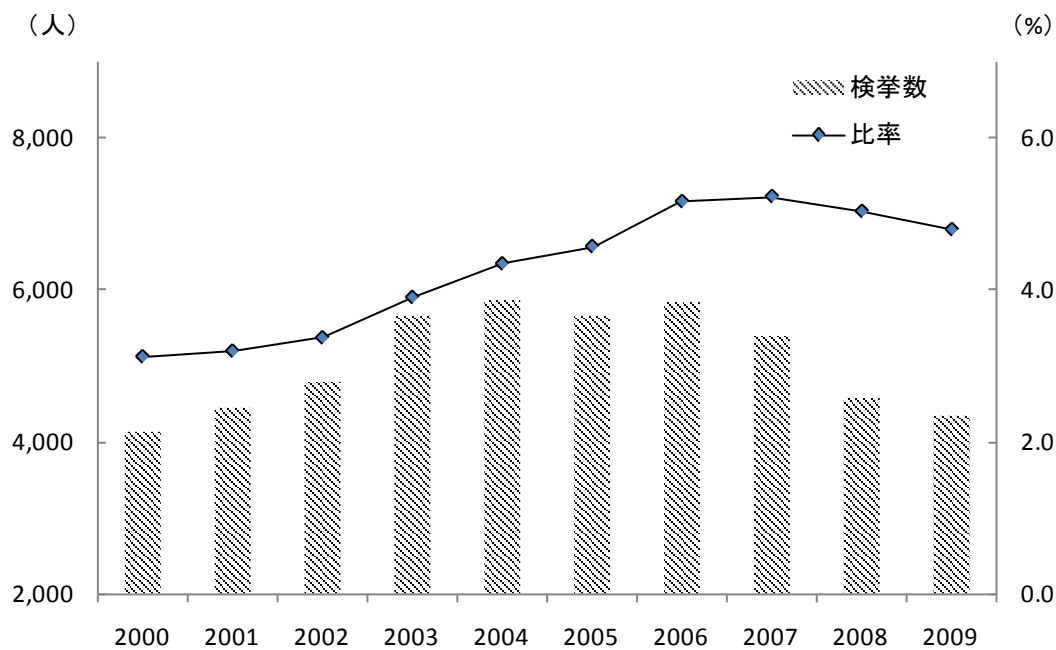


Figure 1 大学生の検挙人員数と全検挙人員数に対する比率の推移

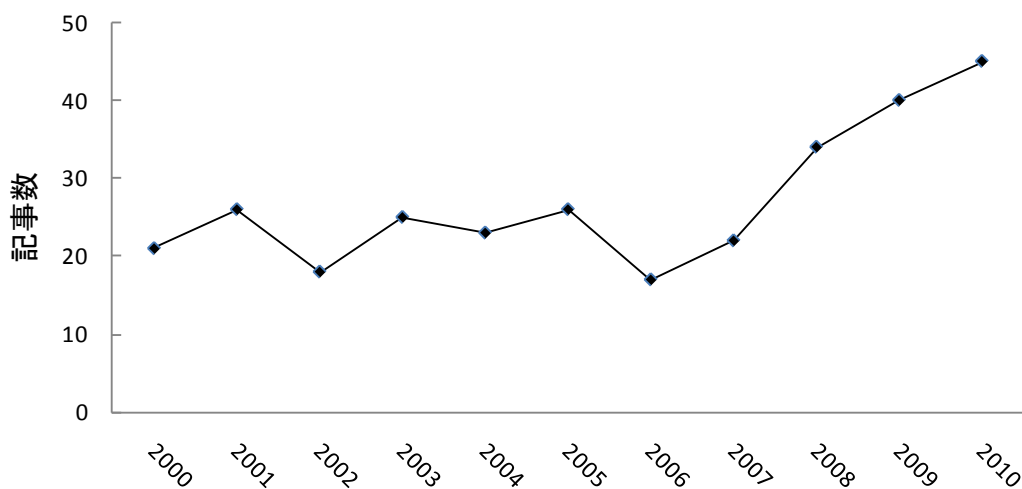


Figure 2 大学生関連の犯罪の新聞報道件数の推移(朝日新聞のデータベースを基に作成)

による協働の帰結として達成されるものといえる。そこで本研究では、学生による大学の安全のための協働を集合行動とみなし、その行動意図の先行要因を検討する。

### 集合効力感の定義と効果

本研究で着目するのは、まず集合効力感

(collective efficacy)の効果である。集合効力感は、これまでに数多くの研究で地域コミュニティの犯罪抑制に対して有効な変数となることが示されてきた。例えば、Sampson., Raudenbush & Earls (1997)は警察統計を用いて集合効力感が実際にその地域の犯罪件数を予測できることを実証し、Simons, Simons, Burt, Brody & Cutrona (2005)は集合効力感

が地域社会における家庭の権威的養育態度と関連しながら犯罪抑制を導くという仮説を実証している。また別の例では、集合効力感が高い地域では住民の犯罪不安感が低くなることが示されている (Jackson, 2004; Oh & Kim, 2009; Taylor, 2002)。これらの研究では犯罪学や社会学の理論的背景から、集合効力感とは未成年の問題行動や地域の秩序に対する住民の関心の高さといった地域コミュニティのインフォーマルな制度として概念化されており、その抑制力によって犯罪を防止したり安心感を高めたりするといった過程が推測されている。ただし、集合効力感と住民による具体的な行動との直接の関連について必ずしも十分に説明されているとはいえない。その一因には、一連の研究において集合効力感が住民同士の凝集性や信頼感によって構成される広義の概念として定義され、その測定に関して研究者による相違が大きいことが挙げられるであろう。例えば Sampson et al. (1997)らは、集合効力感について「インフォーマルな社会的統制」と「凝集性・信頼性」という2つの下位概念によって構成されるものとしているが、Jackson (2004)は集合効力感と「インフォーマルな社会的統制」とを個別の概念として扱っている。本研究では必ずしも上述の例に則るのではなく、集合効力感が地域住民の行動にどのような影響を及ぼすのかという点を検討するために、心理学理論を基盤としたアプローチによって集合効力感をより狭義の概念として扱うことにする。

Bandura (1997, 2009)によると、集合効力感とは特定の目標に対する影響力や問題解決能力が自分と多くの他者によって共有されているという信念として定義される。彼はもともと、ある行為の実行とそれに伴う結果の達成の可能性についての信念として自己効力感を提唱し、そのさまざまな効果が多くの研究によって実証されてきた (Bandura, 1995, 1997; 竹綱・鎌原・沢崎, 1988)。そ

の一方で、ある行為の目的や目標が多くの他者と共有されたものであるという場合は少なくない。そのうえ、私たちを取り巻く社会は常に多くの人々の相互作用と相互依存とで成り立っている。ある個人の行動は常に周囲の他者からの影響を免れるものではなく、その結果もまた周囲の人がどのように反応するかということによって左右される。人は独立した個人としての行為主体であるばかりではなく、集団の一員であり集合的行為主体の一部として存在しているのである。ある個人の行動を十分に予測するためには自己効力感のみならず、集団内における資源分配や情報交換、手本になる行為といった社会的文脈に埋め込まれた変数が必要となることが、いくつかの研究で示されている (Zaccaro, Blair, Peterson & Zazanis, 1995)。そうした観点から特に近年、集合効力感の役割が重視されるようになってきた。

このように集合効力感とは、社会心理学的見地から自己効力感が拡張され提起された概念として位置づけられる。したがって集合効力感とは自己の体験に根ざして形成される信念であり、自己と他者とが実際に社会的な関係を結び、目標や体験や価値観を共有することが影響力の主体を個人から集団レベルに拡張するうえで重要になる。そうした意味で、集合効力感とは自己効力感と密接に関連する概念である (Caprara, Veccinone, Capanna & Mebane, 2009)。したがって、自己効力感がある個人の目標行動を導くように、集合効力感とは集団成員の集合行動を導くことが予測できる。実際にその予測に一致する知見が、多くの研究で得られている (Thomas, McGarty & Mavor, 2009; Van Zomeren, Leach, & Spears, 2010; Van Zomeren, Spears, Fishcher & Leach, 2004)。そうした知見は特に地域コミュニティ研究で数多く、例えば地域の住民活動や様々の住民活動、話し合い (Foster-Fishman, Cantillon, Pierce & Van Egeren, 2007; Mannarini,

Fedi & Trippetti, 2010; Perkins & Long, 2002)や、また防災活動(Paton, Houghton, Gregg, McIvor, Johnston, Bürgelt, et al., 2009)などといった具体的な集合行動への参加に対して、地域住民の集合効力感がポジティブな影響を与えることを示している。さらに別の例では、「みんなの力で政治に影響を与えることができる」という政治的集合効力感が、投票や署名活動といった政治参加を促すという関連が実証されている(Lee, 2005)。これらの知見は、集合効力感すなわち住民たち自身もつ当該の問題解決や目標達成の可能性に関する信念が、集合行動への参加を促すという過程を裏付けるものといえる。したがって、集団の安全の維持・改善という文脈においても、成員同士の力を合わせることによってそれを達成できるという集合効力感が、集団成員の集合行動参加を導く有力な要因になると考えられる。地域コミュニティの成員が地域住民であるように、大学の安全の問題では集団成員としての学生の集合効力感が重要になる。

では、集団成員の間に集合効力感が醸成されるための要因とはどのようなものであろうか。集合効力感とは、影響力を保有する主体として自己と他者を含む集合体や内集団を想定する概念であり、集団成員同士が実際に社会的な関係を結び、目標や体験や価値観を共有する過程で、影響力の主体が個人から集団レベルに拡張されることで形成されるものである。すなわち、成員間の社会的結びつきを認知することが集合効力感の前提となる。そこで、本研究では成員間の社会的結びつきを表象する概念として内集団実体性認知を扱う。

### 集団実体性概念の定義

集団実体性とはCampbel (1958)によって初めて導入された概念である。彼はその定義については集団が「実体としての性質をもつ程度」とだけ言及したが、その後の研究者らによって、集団実体

性の認知の手がかりとして成員間の類似性の効果に注目する研究(e.g., Brewer, Weber & Carini, 1995)や、集団成員の均質性、行動の一致度に注目する研究(e.g., McConnell, Shermann & Hamilton, 1997)などが報告されてきた。Campbel がゲシュタルトの概念を背景にして議論したためか、当初の集団実体性研究では集団全体に対する認知としての均質性や類似性に関心が集まり、集団内で各成員がどのような役割を果たしているのかという側面への関心は比較的低かったといえる。

しかし近年では、集団成員の均質性や類似性という視点に加えて、集団成員間の相互作用性や関わり合いの程度という視点も取り入れた集団実体性の概念化がなされてきている(e.g., Hamilton, Sherman & Castelli, 2002; Yzerbyt, Corneille & Estrada, 2001)。例えば Lickel, Hamilton, Wierzchowska, Lweis, Sherman & Uhles (2000)は、40種類のさまざまな集団について、それぞれの集団実体性といくつかの集団特性との関連を調査した。その結果、規模、歴史(集団の継続期間)、境界の透過性(成員の加入・脱退の容易さ)は集団実体性との相関が認められなかった一方で、成員間の相互作用性が集団実体性と最も高く相関することを見出している。その他に集団実体性との高い相関が認められた集団特性としては、重要度、共通の目標、運命の共有、成員間類似性の認知が挙げられている。Gaertner & Schopler (1998)は、集団内成員間の相互作用が高まることによって集団実体性の認知が高まることを実験によって示した。

Brewer & Harasty (1996)のレビューによると、集団実体性研究の多くが、外集団か、または認知者がメンバーとなっていない集団を対象とするものであった。しかしながら、集団実体性の認知における集団成員間の相互作用性や共有性の重要性を示す研究が増えるに伴い、やがて内集団の実体性認知に関する研究が注目を集めるようになってき

た(e.g., Castano, 2004; Yzerbyt, Castano, Leyens & Paladino, 2000)。そしてこれまでに数多くの研究で、内集団の実体性認知は集団アイデンティティと深く関連することが見出されている(Castano, 2004; Castano, Yzerbyt & Bourguignon, 2003; Hogg, Sherman, Dierselhuis & Maitner, 2007; Yzerbyt et al., 2000)。ただし、内集団認知の研究者においては多くの場合、内集団実体性認知と集団アイデンティティとは関連はあっても別の概念であるとされている(e.g., Castano, 2004; Spears, Scheepers, Jetten, Doosje, Ellemers & Postmes, 2004)。概念的定義としては、集団アイデンティティが自己概念に取り込まれた集団成員性、または他者との関係性として定義されるのに対して、集団実体性認知は集団が実在するものとして認知される程度であり、つまり集団認知の概念的指標であるから、その認知が自己の一部として自己概念を構成するものではないという点で異なる。集団実体性認知の重要な構成要因は、成員間の相互作用性、均質性・類似性、運命や経験の共有などであった。一方の社会的アイデンティティの形成は、自己(内集団)と他者(外集団)とを弁別・比較し自己評価を維持・高揚させようとする欲求(Tajfel, 1974)と同時に、他者との絆を形成し集団に所属しようとする欲求とに基づくことが指摘されている(Hogg, 2000)。したがって内集団実体性の高さは他者との絆や集団への所属に対する欲求とは直接的に適合するものといえよう。その一方で、内集団実体性の高さは内集団と外集団との弁別と比較の顕現性を高めることはできるが、比較の結果としてポジティブな集会的自己評価を得られるかどうかとは直接に結びつかないであろう。集団実体性はポジティブな集会的自己評価と直接には結びつかない点で、集団アイデンティティと弁別されるものと考えられる。

### 内集団実体性と集合効力感

集団の成員が集合効力感を獲得するには、成員間の社会的結びつきを認知することが前提になると既に述べた。内集団実体性認知はその定義から、成員間の社会的結びつきの認知を表象する概念とみなすことができ、集合効力感の先行要因になると考えられる。その背景には進化論的解釈も援用可能であろう(Brewer, Hong & Li, 2004)。内集団実体性が成員に与える効果について Brewer et al. (2004)は、集団実体性が高く認知されることはその集団が1つの行為主体(agency)であると認知されることを意味すると述べている。集団成員は相互作用を通じて価値観や集団としての目標を共有し、それを志向する際の行為主体が個人から内集団へと拡大され認知される。同時に、個々の成員が有する各種の資源に対するアクセス可能性や、それぞれに異なる役割の相互補完的認知が高められ、このような集団は実体性の低い集団よりも適応的であるといえる。ただし内集団実体性と集合効力感との関連について Brewer et al. (2004)は理論的仮説の提示にとどまっており、その実証的研究を蓄積することが望まれる。以上の議論を本研究で適用し、学生による内集団実体性認知が大学の安全についての集合効力感に及ぼす影響を検証する。

### 本研究の目的

以上の議論から、大学の安全や秩序を維持するための学生の協働の意図にポジティブな影響を与える要因として集合効力感を、さらに集合効力感にポジティブな影響を与える要因として内集団実体性を検討する。検証される仮説は以下のとおりである。

仮説 1 集合効力感は協働意図にポジティブな影響を及ぼす。

仮説 2 内集団実体性認知は集合効力感にポジティブな影響を及ぼす。

以上の仮説は、大学の安全という問題について学生同士の社会的関係性への着目から提起されたものである。その一方で現実的な対策として、防犯や大学生としてのモラルに関するガイダンスや講義が多く大学の安全で実施されている。そうした対策は、少なくとも個人の防犯意識やモラルを高めることが期待されているものと推測されるが、同時に安全を集団の問題としてとらえる意識や協働の意図にどのような影響を及ぼしているかという点については未知でもある。そこで本研究では、学生の集合効力感、協働意図のみならず自己効力感と個人的な防犯行動の意図も測定し、大学における安全に関する講義等との間にポジティブな関連が認められるのかを探索的に検討する。

## 調査

### 調査概要

大学における犯罪や迷惑行為に対する不安の実態、及び安全や秩序の維持・改善に寄与する要因を社会心理学的見地から検討するために、質問紙調査をおこなった。近畿圏の3つの大学において調査を実施し、225名から回答を得た。内訳は男性107名と女性117名（不明1名）、平均年齢は20.3歳(SD = 3.7)であった。

### 調査項目

安全のための協働意図：「大学の安全や秩序のためのボランティアに参加したい」「学生の相談にのったりサポートをしたりするボランティアに参加したい」「大学での犯罪や迷惑行為について友達と話し合いたい」などの協働意図の測定のための項目、ならびに「個人的にできる対策をいつも心がけたい」などの個人的対策の意図の測定のための項目を、合わせて13項目を作成した。

集合効力感ならびに自己効力感：「互いに協力して大学の安全を守ることができる」「一人ひとりが心がけて大学の安全に貢献することができる」「私たち学生全体の行動が大学の安心・安全に直接の影響をおよぼす」など、van Zomeren et al. (2004)を参考にした集合効力感の測定を意図した9項目に、「私自身が大学で被害にあわないための対策は難しくない」などの集合効力感の測定を意図した3項目を加えて質問した。

内集団実体性認知：内集団実体性認知を測定するために標準化された心理尺度は管見にして見当たらず、先行研究(Castano et al., 2003; Denson et al., 2006)で用いられた項目を参考にし、9項目を作成した。項目例は、「私たち( )大生はいろいろな知識や情報を共有している」「私たち( )大生は互いに結びつきあっている」「私たち( )大生には何らかの共通の価値観がある」などである。また、妥当性の検討のためにKarasawa(1991)の集団同一視尺度から抜粋、改変した6項目を加えて質問した。

安全やモラルに関する講義への参加：「あなたは大学に入学して以来、防犯意識や大学生としてのモラルを高めるためのガイダンスや、講演、特別講義などに出席したことがありますか」と質問し、「一度もない」「一回は出席したことがある」「二回以上出席したことがある」の選択肢から回答を求めた。

学内の友人数：内集団実体性認知が実際の成員間の相互作用に裏付けられることを確認するため、「在学中の大学のなかで、あなたが「顔を合わせれば自然に会話ができる」程度以上に親しい人の数」を尋ねた。「1~5人」から5人刻みで「31人以上」までと「0人」の選択肢から選んでもらった。

被害に対する不安：安全のための協働意図、集合効力感・自己効力感、内集団実体性認知に関す

る項目は、いずれも「1.そう思う」から「5.そう思わない」の5段階尺度で評定してもらった。

## 結果

### 尺度の検討

安全やモラルに関する講義への参加、ならびに学内の友人数の回答分布は以下の通りであった。まず講義への参加に対しては「一度もない」と回答した人が65.8%、「1回は出席」が23.1%、「2回以上」が10.2%となった。次に、友人の数は「6-10人」と回答した人が30.7%、「11-15人」が19.1%、「1-5人」が14.7%で、以下「16-20人」「31人以上」「21-25人」「25-30人」「0人」の順に割合が高

かった。

仮説の検証に用いる尺度を構成し、その信頼性ならびに妥当性を検証する分析をおこなった。まず安全のための協働意図について、13項目を因子分析（主因子法プ・ロマックス回転）にかけ、尺度構成を探索的に検討した。固有値減衰状況(5.21, 2.09, 1.30, 0.93, ...)と項目解釈から3因子解が妥当と判断し、因子負荷量が.45以下、あるいは複数の因子に.35以上の負荷をもつ項目を削除して分析を繰り返した。その結果を示したのがTable 1である。第1因子は「犯罪や迷惑行為について友達と話し合いたい」「ボランティアに参加したい」「気づくことがあればなるべく大学に報告したい」など、大学の安全や秩序のために幅広く貢献するよ

Table 1 協働・個人的対策の意図尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3
大学での犯罪や迷惑行為について 友達と話し合いたい	<b>.936</b>	-.205	.011
安全のために必要なことを 友達と一緒に考えたい	<b>.835</b>	-.102	.027
学生の相談にのったりサポートをしたりするボランティアに参加したい	<b>.720</b>	.124	-.143
大学の安全や秩序のためのボランティアに参加したい	<b>.669</b>	.192	-.151
大学の安全や秩序について 気づくことがあればなるべく大学に報告したい	<b>.565</b>	.129	.137
大学での犯罪や迷惑行為に巻き込まれないための対策を 友達と共有したい	<b>.529</b>	.175	.187
友達の様子がいつもと違うと感じたら、声をかけてあげたい	-.050	<b>.976</b>	-.064
危険や心配を感じたら、友達にも注意をよびかけたい	-.028	<b>.825</b>	.037
友達が困った状況になった場合、助けになるならどんなことでもしてやりたい	.061	<b>.735</b>	.039
個人的にできる対策をいつも心がけたい	.048	.063	<b>.796</b>
つねに用心深く行動したい	-.065	-.056	<b>.766</b>
因子寄与率 (%)	45.68	15.07	11.60
因子間相関		.568	.359
			.173

註：分析過程で「できるだけ他人と関わらないようにしたい」を除外。

Table 2 集合効力感・自己効力感尺度の因子分析結果

	F1	F2
大学の安全のために 私たちそれぞれにできることがある	.777	-.113
私たち ( ) 大生の力で 安心して快適な大学環境をつくる ことができる	.757	.080
私たち ( ) 大生は 互いに協力して大学の安全を守るこ とができる	.694	.127
私たち ( ) 大生は 一人ひとりが心がけて大学の安全に 貢献することができる	.664	.045
大学の安全の維持や改善のために 私たち学生の影響力は 大きい	.663	-.046
私たち学生全体の行動が 大学の安心・安全に直接の影響 をおよぼす	.614	-.036
私たち学生は ( ) 大での迷惑行為や犯罪被害をなくす ことができる	.515	-.029
私は大学で迷惑や危険なことにまきこまれないようにう まくやれる	-.090	.975
私はトラブルを最小限にして大学生活を送ることができる	.109	.718
私自身が大学で被害にあわないための対策は難しくない	-.027	.712
<b>因子寄与率 (%)</b>	<b>37.75</b>	<b>14.38</b>
<b>因子間相関</b>		<b>.398</b>

註：分析過程で「私たち学生が何をしようとも ( ) 大で犯罪や迷惑行為が起きるのは防ぎようがない」「学生同士の力で ( ) 大の安全や秩序を守るとは非常に困難なことだ」2項目を除外。

うな6項目から構成されており、「一般的対策意図」因子として解釈した。第2因子は「友達にも注意をよびかけたい」「助けになるならどんなこともしてやりたい」など、友人に対する直接的なサポートを示すような3項目から構成され、「友人支援意図」因子として解釈した。第3因子は「個人的にできる対策をいつも心がけたい」「つねに用心深く行動したい」の2項目からなり、「個人的対策意図」因子として解釈した。各因子の尺度信頼性を検討するためにクロンバックのアルファ係数を算出したところ、一般的対策意図は $\alpha=.88$ 、友人支援意図は $\alpha=.88$ 、個人的対策意図は $\alpha=.77$ となった。いずれも内的整合性に特段の問題はないものと判断し、それぞれに得点を合成し指標とした。集合効力感・自己効力感尺度について、12項目を因子

分析（主因子法・ロマックス回転）にかけ、尺度構成を検討した。固有値減衰状況と項目内容の解釈から、想定された通りの2因子解が妥当と判断し、因子負荷量が.45以下、あるいは複数の因子に.35以上の負荷をもつ項目を削除して分析を繰り返した。その結果を示したのがTable 2である。第1因子は「大学の安全のために私たちそれぞれにできることがある」「大学の安全の維持や改善のために 私たち学生の影響力は大きい」などの7項目から構成され、「集合効力感」因子として解釈した。第2因子は「私は大学で迷惑や危険なことにまきこまれないようにうまくやれる」などの3項目から構成され、「自己効力感」因子として解釈した。各因子のアルファ係数は、集合効力感が $\alpha=.84$ 、自己効力感が $\alpha=.84$ となり、項目の得点を



Table 3 内集団実体性認知尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3
私にとって ( ) 大の学生であることは誇らしいことだ	<b>.825</b>	-.039	.054
( ) 大に愛着を感じる	<b>.812</b>	.021	.039
私は ( ) 大の学生だという意識は強いほうだ	<b>.724</b>	.026	-.115
私は ( ) 大の学生だということを実感することが多い	<b>.690</b>	.059	-.037
私は自己紹介のときに ( ) 大の学生であることにふれることが多い	<b>.515</b>	-.009	.109
私たち ( ) 大生は それぞれに個性がある	.015	<b>.750</b>	-.155
私たち ( ) 大生は 互いに結びつきあっている	-.039	<b>.665</b>	.144
私たち ( ) 大生は いろいろな知識や情報を共有している	.083	<b>.533</b>	.117
私たち ( ) 大生には それぞれに役割がある	-.013	<b>.522</b>	-.031
私たち ( ) 大生は ある一人の行動や考えが誰か別の ( ) 大生に影響を与えている	.050	<b>.467</b>	-.049
私たち ( ) 大生は 同じような雰囲気をもっている	.055	-.219	<b>.771</b>
私たち ( ) 大生の多くに共通する特徴がある	-.094	.119	<b>.690</b>
私たち ( ) 大生には 何らかの共通の価値観がある	.058	.167	<b>.491</b>
<b>因子寄与率 (%)</b>	<b>33.34</b>	<b>7.21</b>	<b>5.71</b>
<b>因子間相関</b>		<b>.558</b>	<b>.542</b>
			<b>.527</b>

註：分析過程で「私は典型的な ( ) 大の学生らしい人間だ」「( ) 大はひとまとまりの組織だ」2項目を除外。

合成して指標とした。内集団実体性認知尺度については、12項目を因子分析（主因子法プ・ロマックス回転）にかけたところ、想定された2因子構造（内集団実体性認知・集団成員性）では固有値累積率が低いと思われた(49.9%)ため、固有値減衰状況(5.41, 1.48, 1.28, 0.98, ...)と項目解釈から3因子構造を採用した。因子負荷量が.45以下、あるいは複数の因子に.35以上の負荷をもつ項目を削除して分析を繰り返した結果を示したのが Table 3である。第1因子は「私にとって ( ) 大の学生であることは誇らしいことだ」など Karasawa (1991)の集団同一視尺度から抜粋・改変した項目

のみから構成され、「集団成員性」因子として解釈した。第2因子は「私たち ( ) 大生は それぞれに個性がある」「私たち ( ) 大生は 互いに結びつきあっている」など、成員間の相互作用性や共有感覚を示す5項目から構成され、「内集団実体性認知」因子として解釈した。第3因子は「私たち ( ) 大生は 同じような雰囲気をもっている」などの3項目から構成され「成員共通性認知」因子として解釈した。各因子間には.5を上回る程度の正の相関関係が認められた。本研究の仮説の検証にかかわる因子は内集団実体性認知であり、集団成員性と成員共通性認知は以降の分析に用いなか

Table 4 各指標の記述統計量

	内集団 実体性認知	集団 成員性	成員共通性 認知	自己効力感	集合効力感	一般的支援	友人支援	個人的対策
<i>M</i>	3.08	2.90	2.81	3.67	2.99	2.79	4.02	3.61
<i>SD</i>	0.77	1.00	0.90	0.87	0.76	0.91	0.84	0.96

Table 5 各指標間の相関分析結果

	2	3	4	5	6	7
1 内集団 実体性認知	.211 **	.526 ***	.411 ***	.325 ***	.041	.172 *
2 自己効力感	1	.341 ***	.167 *	.206 **	.202 **	.159
3 集合効力感		1	.502 ***	.394 ***	.162 *	.097
4 一般的支援			1	.540 ***	.299 ***	.169 *
5 友人支援				1	.136 *	.088
6 個人的対策					1	.035 *
7 講義出席数						1

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ ;  $n = 223 - 225$

った。内集団実体性認知因子のアルファ係数は  $\alpha = .74$  となり、それぞれに項目の得点を合成して指標とした。以上の各変数の記述統計を Table 4 に示す。また内集団実体性認知が実際の成員間の相互作用に裏付けられているかという点で妥当性を確認するために、内集団実体性認知指標と学内の親しい人の数との相関分析をおこなった。その結果、両者の間には正の相関が認められた ( $r = .25$ ,  $p < .01$ )。

仮説の検証のために各指標間の相関分析をおこなった。その結果を Table 5 に示す。分析の結果、まず一般的支援に対しては集合効力感、内集団実体性認知がポジティブな関連をもつことが示された。一般的支援と講義出席数、自己効力感との間

でも正の相関が有意となったが係数は小さいものであった。次に友人支援に対しても同様に、集合効力感、内集団実体性認知によるポジティブな相関が認められ、自己効力感による相関は比較的小さいものであった。これらの結果に対して、個人的対策については自己効力感、集合効力感とのポジティブな相関が認められたのみで、またそれらの相関係数も小さいものであった。

次に、集合効力感、自己効力感、内集団実体性認知、講義出席を説明変数、一般的対策、友人支援、個人的対策、さらに集合効力感を目的変数とした重回帰分析をおこなった (Table 6)。その結果、一般的支援並びに友人支援に対しては集合効力感、内集団実体性認知が有意な影響力をもつことが示

Table 6 重回帰分析結果

	一般的支援	友人支援	個人的対策	集合効力感
集合効力感	.41 ***	.29 ***	.14	-
自己効力感	-.02	.07	.17 *	.24 ***
内集団実体性認知	.18 **	.16 *	-.07	.48 ***
講義出席数	.10	.02	.01	-.02
$R^2$	.29	.18	.05	.33
調整済み $R^2$	.28	.17	.04	.32

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

された。個人的対策に対しては、自己効力感のみ有意な影響力が認められた。集合効力感を目的変数とした分析では内集団実体性認知と自己効力感の影響力が有意となり、特に前者の偏回帰係数が高かった。

#### 考察

大学における安全のための協働の意図、集合効力感、内集団実体性認知、ならびに自己効力感、防犯やモラルに関する講義等への出席の関連を検討した結果、以下のことが明らかとなった。まず一般的支援、友人支援といった協働意図は、集合効力感、内集団実体性認知との間にポジティブな相関関係が認められた。重回帰分析においても同様の結果が得られ、協働意図に対して集合効力感、内集団実体性認知の効果はその他の変数の効果を統制したうえでも有意となることが示された。また、集合効力感に対しては内集団実体性認知による影響が認められ、仮説1・2と一致する結果が得られた。すなわち、友人や周囲の人に安全を脅かす問題が及んでいないかという配慮や注意をもって学生同士で共に大学の安全のために行動することは集合行動の1つであり、その意図が高められ

るには自分たちの行動によって大学の安全や秩序を守ることができるという信念である集合効力感をもつことや、学生同士が相互作用を通じて共有感覚を持って集団としての実体性を認知することが重要になるといえる。

以上のように協働の意図に対して集合効力感と自己効力感との役割の相違は明らかであり、集合効力感の重要性が示された。自分自身が個人として安全を確保できるという自己効力感は犯罪や迷惑行為の被害を個人的に回避するための行動意図を高める可能性はあるが、友人支援や一般的対策といった協働の意図に対する影響力は認められず、自己効力感と集合効力感とは正の相関関係にありながら行動の意図に対して果たす役割は明確に異なるといえる。また内集団実体性認知が集合効力感のみならず自己効力感に対してもポジティブな関連が認められたことから、学生同士が共に大学の安全や秩序の維持改善に寄与することを広く促すためには学生が大学という内集団に対する実体性を認知する関係性を築くことは重要であるといえる。

本研究では以上のような知見と示唆が得られた一方で課題も残された。まず重回帰分析の結果では、個人的対策の説明モデルの決定係数が非常に

低く、本研究で取り上げた変数以外の効果をさらに検討していく必要がある。また講義等への参加の効果が本研究の分析の結果ではほぼ認められなかった。しかし講義等への参加がその後の効力感や行動の意図にどのような影響を及ぼすのかは、その講義等の内容に強く依存するものであろう。本研究では回答者が参加した講義等がどのような内容であったかという点には踏み込んでいない。大学による講義やガイダンスが学生の意識と行動とに対してどのような影響を及ぼすのか精査することは今後の課題としなければならない。次に、内集団実体性認知の重要性が明らかにされたことで、ではどうすれば学生の内集団実体性認知を高めることができるのかということが課題となる。成員間の相互作用の指標として本研究では学内の友人の数が内集団実体性認知と正の相関をもつことがしめされたが、その係数は高いとはいえない値であった。今後は、学生が内集団実体性認知を高めるような関係性を築くために求められる要因を検討することも求められる。

#### 引用文献

- Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. New York: Cambridge University Press.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Bandura, A. (2009). Exercise of human agency through collective efficacy. *Current Directions in Psychological Science*
- Brewer, M. B. & Harasty, A. S. (1996). Seeing groups as entities: The role of Perceiver motivation. In R. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of Motivation & Cognition*. Vol. 3. New York: Guilford Press. pp.347-370.
- Brewer, M. B., Hong, Y. Y & Li, Q. (2004). Dynamic entitativity. In V. Yzerbyt, C. M. Judd & O. Corneille (Eds.), *The Psychology of Group Perception*. New York: Psychology press. pp. 25-38.
- Brewer, M. B., Weber, J. G. & Carini, B. 1995 Person memory in intergroup contexts: Categorization versus individuation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 29-40.
- Campbell, D. T. (1958). Common fate, similarity, and other indices of status of aggregates of persons as social entities. *Behavioral Science*, 3, 14-25.
- Caprara, G. V., Vecchione, M., Capanna, C. & Mebane, M. (2009). Perceived political self-efficacy: Theory, assessment, and applications. *European Journal of Social Psychology*, 39, 1002 - 1020.
- Castano, E. (2004). On the advantages of reifying the ingroup. In V. Yzerbyt, C. M. Judd & O. Corneille (Eds.), *The Psychology of Group Perception*. New York: Psychology press. pp. 381-400.
- Castano, E., Yzerbyt, V. & Bourguignon, D. (2003). We are one and I like it: The impact of ingroup entitativity on ingroup identification. *European Journal of Social Psychology*, 33, 735-754.
- Denson, T. F., Lickel, B., Curtis, M., Stenstrom, D. M. & Ames, D. R. (2006). The roles of entitativity and essentiality in judgments of collective responsibility. *Group Processes & Intergroup Relations*, 9, 43 - 61.
- Foster-Fishman, P. G., Cantillon, D., Pierce, S. J. & Van Egeren, L. A. (2007). Building an active

- citizenry: The role of neighborhood problems, readiness, and capacity for change. *American Journal of Community Psychology*, 39, 91-106.
- Gaertner, L. & Schopler, J. (1998). Perceived ingroup entitativity and intergroup bias: An interconnection of self and others. *European Journal of Social Psychology*, 28, 963-980.
- Hamilton, D. L., Sherman, S. J. & Castelli, L. (2002). A group by any other name: The role of entitativity in group perception. In S. Wolfgang & M. Hewstone (Eds.), *European Review of Social Psychology*. Vol. 12. New York: John Wiley & Sons. pp. 139-166.
- Hogg, M. A. (2000). Subjective uncertainty reduction through Self-categorization: A motivational theory of social identity processes. In S. Wolfgang & M. Hewstone (Eds.) *European Review of Social Psychology*. Vol. 11. New York: John Wiley & Sons. pp. 223-255.
- Hogg, M. A., Sherman, D. K., Dierselhuis, J., Maitner, A. T. & Moffitt, G. (2007). Uncertainty, entitativity, and group identification. *Journal of Experimental Social Psychology*. 43. 135-142.
- Jackson, J. (2004). Experience and expression: Social and cultural significance in the fear of crime. *British Journal of Criminology*, 44, 946-966.
- 関西大学 (2008). 2008 年に判明した薬物事件に関する報告書 (総括) <  
[http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/pdf/081219\\_i\\_soukatsu.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/mt/archives/pdf/081219_i_soukatsu.pdf) >
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of groups identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293-307.
- Lee, F. L. (2005). Collective efficacy, support for democratization, and political participation in Hong Kong. *International Journal of Public Opinion Research*, 18, 297 -317.
- Lickel, B., Hamilton, D. L., Wierzchowska, G., Lweis, A., Sherman, S. J. & Uhles, A. N. (2000). Varieties of groups and the perception of group entitativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 223-246.
- McConnell, A. R. Sherman, S. J. & Hamilton, D. L. (1997). Target entitativity: Implications for information processing about individual and group targets. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 750-762.
- Mannarini, T., Fedi, A. & Trippetti, S. (2010). Public Involvement: How to Encourage Citizen Participation. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 20, 262-274.
- Oh, J. H. & Kim, S. (2009). Aging, neighborhood attachment, and fear of crime: Testing reciprocal effects. *Journal of Community Psychology*, 37, 21-40.
- Paton, D., Houghton, B. F., Gregg, C. E., McIvor, D., Johnston, D. M., Bürgelt, P., Larin, P., Gill, D. A., Ritchie, L. A., Meinhold, S. & Horan, J. (2009). Managing tsunami risk: social context influences on preparedness. *Journal of Pacific Rim Psychology*, 3, 27-37.
- Perkins, D. D. & Long, D. A. (2002). In A. T. Fisher, C. C. Sonn and B. J. Bishop (Eds.) *Psychological sense of community: Research, applications, and implications*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.
- Sampson, R. J., Raudenbush, S. W. & Earls, F. (1997). Neighborhoods and violent crime: A multilevel study of collective efficacy. *Science*, 277, 918-924.
- Simons, R. L., Simons, L. g., Burt, C. H., Brody, G. H.

- & Cutrona, C. (2005). Collective efficacy, authoritative parenting, and delinquency: A longitudinal test of a model integrating community- and family-level processes. *Criminology*, 43, 989-1028.
- Spears, R. Scheepers, D., Jetten, J., Doosje, B., Ellemers, N. & Postmes, T. 2004 Entitativity, group distinctiveness, and social identity: Getting and using social structure. In V. Yzerbyt, C. M. Judd, & O. Corneille (Eds.), *The Psychology of Group Perception*. New York: Psychology. press. pp. 39-60.
- Tajfel, H. (1974). Social identity and intergroup behavior. *Social Science Information*, 13, 65-93.
- 竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之 (1988). 自己効力に関する研究の動向と問題. *教育心理学研究* 36, 172-184.
- Taylor, R. B. (2002). Fear of crime, social ties, and collective efficacy: Maybe masquerading measurement, maybe déjà vu all over again. *Justice Quarterly*, 19, 773-792.
- Thomas, E. F., McGraty, C. & Mavor, K. I. (2009). Transforming “Apathy into movement”: The role of prosocial emotions in motivating action for social change. *Personality and Social Psychology Review*, 13, 310-333.
- Van Zomeren, M., Spears, R., Fischer, A. H., & Leach, C. W. (2004). Put your money where your mouth is!: Explaining collective action tendencies through group-based anger and group efficacy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 649–664.
- Zaccaro, S. J., Blair, V., Peterson, C. & Zazanis, M. (1995). Collective efficacy. In J. E. Maddux (Ed.) *Self-Efficacy, Adaptation, and Adjustment: Theory, Research, and Application*. Plenum Press: New York. Pp.305-328.
- Yzerbyt, V., Castano, E., Leyens, J. & Paladino, M. (2000). The primacy of the ingroup: The interplay of entitativity and identification. In S. Wolfgang & M. Hewstone (Eds.) *European Review of Social Psychology*. Vol. 11. New York: John Wiley & Sons. pp. 257-295.
- Yzerbyt, V., Corneille, O. & Estrada, C. (2001). The interplay of subjective essentialism and entitativity in the formation of stereotypes. *Personality and Social Psychology Review*, 5, 141-155.